

2020（令和2）年度 音楽鑑賞教育振興 助成研究募集

入選研究計画論文

《2020年度 実施概要》

○募集テーマ

鑑賞領域の学びを中心とした、音楽科教育に資する実践的な研究

○応募状況と入選数

応募数：4件 入選数：2件

○審査基準

次の①から④までを満たす研究計画である。

- ① 鑑賞領域の学びを中心としている
- ② これからの音楽科教育に資する内容である
- ③ 授業実践による検証を伴った研究である
- ④ 研究の成果が、音楽科教育において広く普及することが見通せるものである

○副賞

青森県 八戸市中学校郷土の音楽の授業研究会
研究助成金：499,790円
力田和歌子 研究助成金：500,000円

（研究助成金額は、研究計画書とともに提出された予算書に基づき、選考委員会において決定しました。）

○選考委員

河野正幸 聖徳大学教授／全日本音楽教育研究会副会長
辻村哲夫 選考委員長／元文部省初等中等教育局局長／公益財団法人音楽鑑賞振興財団常務理事
丸山忠璋 元武蔵野音楽大学教授

○選考専門委員

小佐野圭 玉川大学教授／全日本音楽教育研究会常任理事
加藤富美子 東京音楽大学客員教授
藤沢章彦 元国立音楽大学教授／公益財団法人音楽鑑賞振興財団理事

○後援

全国都道府県教育長協議会／全日本音楽教育研究会／全国連合小学校長会／全日本中学校長会／全国高等学校長協会／一般財団法人日本私学教育研究所

総 評

音楽の聴き方は人それぞれですが、漫然と聞き流すか、それが誕生した歴史的背景などを知り、美しさや良さを味わいながら鑑賞するかでは、音楽の存在価値は全く違ったものになります。

学校で鑑賞指導を行うのは、子どもたちが生涯にわたって音楽に親しむ基礎的な力を育むためです。それが一人ひとりの人生をより豊かに楽しくする力にもなるからです。

その意味で音楽鑑賞に子どもたちの興味関心を引き付ける指導が極めて重要です。そうした指導の力は先生たちの地道な研究の積み重ねを通してより高められていきます。研究活動を支援する当財団の助成事業は、こうした考えに立って実施しております。

本年度入選された2つの研究は、いずれも、独自の構想をもち、課題や目的、研究の道筋も明確で、その成果を大いに期待しているところです。

（選考委員長：辻村哲夫）

選 評

本年度は、初めて2件の入選となりました。

八戸市中学校郷土の音楽の授業研究会は、今日強く求められている生活や社会と音楽、そして自分との関わりについて実感できる鑑賞指導の研究です。地元の伝統芸能を取り上げ、授業展開とそれに必要で効果的な教材（音声・映像等）の制作を試みるものです。

力田先生は、鑑賞の学習において、しっかりと知覚・感受すること、そしてそのことを書いたり発言したりする言語能力を同時に育成することで、学習したことの定着を図るための学習指導の研究です。生徒個人の感じ取りが言語活動によって共感、触発され、深い学びに結びつく授業展開を、小学校での学習も視野に入れながら進めるものです。

どちらも、実践的な願いや発想から生まれた研究計画だと思います。粘り強い取り組みで良い成果となりますよう期待しています。

（選考専門委員チーフ：藤沢章彦）

● 入選

<研究テーマ>

生活や社会の中の音楽・音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成
～「八戸三社大祭」を中心とする郷土の音楽の鑑賞指導と教材開発～

八戸市中学校郷土の音楽の授業研究会

代表：長者久保 希史子（八戸市立北稜中学校教頭）

三浦ゆかり（八戸市立大館中学校） 鳩 智恵子（八戸市立江陽中学校）

本田 晶美（八戸市立市川中学校） 柏崎 智子（八戸市立長者中学校）

南澤まゆみ（八戸市立下長中学校） 相澤 賢（八戸市立白山台中学校）

椀沢 陽子（八戸市立鮫中学校） 大久保美里（八戸市立三条中学校）

1. 研究の動機と目的

これまでの郷土の音楽を扱う授業では、曲の概要や背景の理解を中心とした鑑賞の授業や、外部講師から楽器の奏法や歌唱方法を学ぶ授業が多く見られた。それは、西洋音楽を中心に学んできた我々指導者が、日本の伝統的な音楽や郷土に根付く音楽の特徴をとらえることや、日本の伝統的な音楽で使われる用語に難しさを感じたり、根拠をもって郷土の音楽に価値を見いだしたりすることが難しく、どちらかという、自身も理解しやすかったり指導しやすかったりする部分に学習の中心を据えてきたからではないかと思われる。

しかし、授業において、郷土の音楽の旋律や楽器・唱法を理解するだけでなく、その音楽の全体像を理解して唄や楽器と関連付けたり、動きのあるものは動作との関わりなどと関連させて学習することにより、郷土の音楽の旋律等の理解を深めるだけでなく、郷土の音楽を肯定的に受容する態度を身に付けること、郷土の音楽文化に対する肯定感や価値観を養うこと、愛郷

心を育成し、郷土の音楽や祭の伝承を担う人材を育成することなどが考えられる。

また、それらの学習を通して、生徒がその後の人生において、自分の身近な生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と主体的に関わり、心豊かな生活を営むことにつながると考える。

生徒に上記に述べた資質・能力を育成するために、本研究においては次の2点について研究を進める。

○研究の視点1「教材分析に基づく題材構成」

郷土の音楽の特徴やよさを理解するために、授業で取り扱っている楽曲（西洋音楽）の教材分析の手法を取り入れながら、郷土の音楽の構造を理解するための教材分析を行う。その際、背景にある文化や歴史と関わらせて、音楽だけでなく多角的な見方で教材を分析する。それを元に、生徒が郷土の音楽の何をどのように学ぶのか、郷土の音楽と生活や社会との関わりをどのように考え価値意識をもつのか、これからの人生にその音楽とどのように関わりをもち、豊

かに生きていくことができるかを考え、題材構成する。

次に、その視点や方法が、他の郷土の音楽を扱う際にも活用できるように、教材分析の視点・方法や題材構成の仕方についての基本的な手順を作成したい。ただし、郷土の音楽のもつ役割や性格によっては一つの方法で教材分析及び題材構成をすることは難しいことが考えられる。そこで、本研究で取り扱う「八戸三社大祭」と事前研究で取り扱った「えんぶり」など、八戸の郷土の祭の音楽を軸にしなが、これらの他に県内外の様々な地域の郷土の音楽を取り上げ、教材分析とそれに基づく題材構成、授業実践を積みながら、郷土の音楽の学びの視点と指導のあり方を探る。

それにより、生徒にとっては、より深まりのある学習内容となり、指導者にとっては、郷土の音楽や我が国の伝統音楽を取り扱う際にこの手順を活用したり方法等を参考にしたりすることで、その音楽の特徴や魅力及び重要性をより深く理解し、音楽の価値を実感しながら授業ができるようになるものと考えている。

○研究の視点2 「教材音源の活用についての研究及び教材音源の制作」

教材として活用できる教科書準拠や市販の教材音源は、実際の祭の様子が中心となり、祭の全体像の中に音楽があるという最も当然な映像である。しかし、授業内容によっては、楽器や唄などにより焦点をあてた音源や映像が必要となる。そこで研究の視点2として、授業において、

- ・どのような音源及び映像資料を使用すると生徒が聴き取り感じ取る力を深めることができるのか
- ・市販教材をどのように活用するのか

- ・必要とする音源あるいは映像資料をどのように撮影・編集すれば授業に効果的に活用できるのか

など、題材と教材音源の関連や取り上げ方、自作音源の作成について研究する。

2020年度に事前研究として、「えんぶり」を教材とした題材構成及び授業実践、音源映像の教材開発を行った。教材分析から「えんぶり」の音楽の特徴を理解し、そこから導き出した指導の視点を元に、どのような音や映像が必要か、どのように撮影すれば生徒が特徴を聴取し、理解し聴き深め価値意識をもつことができるのかを考え、取材をして映像資料を作成した。実際の授業では、音楽と祭との関わりはもちろんであるが、自分たちの生活と祭や祭の音楽との関連を理解することができ、主体的に鑑賞することができた。このことから、明確な教材分析や授業の目的に基づく映像制作はとても有効であると言える。

2つの視点で研究を進めるが、郷土の音楽は音楽の特徴や祭と音楽との関わりがとらえやすい「えんぶり」のようなものばかりが存在するわけではない。様々な郷土の音楽をどのように分析し、学びの視点をどこに据えるかについてはさらに研究・実践が必要となる。

本研究では、事前研究の成果及び課題をふまえ、「えんぶり」とは音楽の有様や音楽と祭の関わりが異なる「八戸三社大祭」の音楽を研究の中心として取り上げる。教材分析による郷土の祭の音楽の特徴等の分析から、よさや美しさを聴き味わわせるための学びの視点を明確化し、題材構成・音源教材制作・授業等の実践を通して、生活や社会の中の音楽・音楽文化と豊かに関わる資質・能力をどのように育成するこ

とができるか研究を進める。

併せて、「ねぶた」や「虎舞」など、様々な郷土の音楽も取り上げる。他の郷土の音楽を学ぶことは、共通性・固有性を理解し、祭と音楽、祭の音楽と私たちの生活との関わりについて考えをひろげることにつながる。

郷土の様々な音楽のよさや美しさを深く味わいながら鑑賞することが生徒にどのような学びをもたらすのか、音や音楽、音楽と自分とのつながりを考え、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するためにはどのように題材を構成するのか、実践からその有効性を提示することが目的となる。

2. 研究の概要

本研究は、郷土の音楽を教材とし、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するものである。

八戸地域は、昔から夏に冷たく湿った偏東風（ヤマセ）が吹くため農作物が育たず、度々凶作となって人々の生活が脅かされてきた。そのため、豊作祈願・豊作加護の神事的意味合いの強いものや、凶作などで亡くなった死者を弔う意味合いをもつものが多い。今回中心とする「八戸三社大祭」も豊作祈願・豊作加護の祭の一つであり、本来は8月下旬（現在は8月1日～3日）に行われていた。山車が各町内の小屋から出発し戻るまで音楽が動きと深く関わっているので、40歳後半以上の人々にはお囃子を聴いて祭の進行状況がつかめたり、心が躍ったりする場面がある。

しかし、交通網・連絡網の発達や産業構造の変化に伴い、観光客誘致のイベントとしての性格が強くなり、山車小屋が集められ町内からの出発が無くなったり、東北の夏祭りとの関連で

期日が変わったため季節感がなくなり、生徒にとっては、祭の意味合いやお囃子を中心とした祭の音楽への理解は薄くなっていると思われる。併せて、少子化や部活動との関わりで、祭に、運営やお囃子で参加する児童生徒が減ったため、祭囃子をきいて心がうきうきするというような体験も少なくなっている。

具体的には、次の3点を研究の重点に据え、実践したい。

(1) 「音楽を形づくっている要素」に基づいて、郷土の音楽をとらえる

平成20年告示の学習指導要領改訂で設定された[共通事項]＝「音楽を形づくっている要素」が表現及び鑑賞の各活動の支えとなり、生徒が音楽のよさや美しさを感じ取ったり考えたり表現する根拠となっている。この「音楽を形づくっている要素」を視点とした教材分析を行う。加えて、「八戸三社大祭の『木遣り唄』の声の音色」などのように、分析したことから音楽が演奏される場面をより具体的に示すことにより、音楽の特徴がさらに明確になるものとする。

また、音楽が祭の内容や進行と大きく関わっているところがあるので、形式や構成については、祭の全体像を十分に把握した上で詳しい分析を行い、分析に基づいた特徴の明確化を行うことが、郷土の音楽の理解につながると考える。

(2) 授業構想

本研究では、音楽の特徴を理解し、その特徴を踏まえて、その祭と音楽が一体であること、祭の音楽の存在価値、この祭や音楽がこの土地で必要とされている背景、山車組それぞれのお囃子の共通性・固有性や組同士の類似性、歴史や他の音楽・芸術とのかかわり、伝承の視点で

聴く祭の音楽、類似する祭の音楽の特徴などについて考え、価値意識をもたせる。それにより、自分や自分とつながる社会や生活との直接的な関係性で理解し、郷土の音楽を愛好したり聴き深めることができると考える。

そのために、題材における指導の流れについての試案を次のように設定した。

- ① 全体像の視聴から、祭のどの場面で音楽が演奏されているか理解する
- ② 旋律の聴取（歌う体験も含む）
- ③ 楽器とその旋律の聴取（演奏体験も含む）
- ④ 音楽の特徴をまとめ、よさや美しさを考える
- ⑤ 祭と音楽との関わり、音楽と歴史や他の芸術・文化との関わり、祭の伝承と音楽との関わりについて調べたり考えたりする
- ⑥ 祭における音楽の価値や果たす役割、自分の生活と祭の音楽との関わりについて考える

授業実践を積み重ね、祭事の内容や意味合いなどが違うと、上記の⑤について生徒の調査内容や調査方法を変更する必要があると考えられる。その際には、音楽の何を手がかりにして祭と音楽を結びつけて考えたり理解したりして祭の音楽を味わうのかを、指導者側が検討し、明確にして授業を行い、指導の視点や流れについての検証を行う。

また、授業においては同じ方法や視点で教材分析をした他の郷土の音楽を取り入れ、比較鑑賞を行う。一つの音楽からその価値を聴き取り考えることはできるが、比較鑑賞を通して生徒自身が発見する共通性・固有性や、そこから見いだす音楽の価値は、教師が理論として指導したり資料を提示したりするよりも、何倍もの学習効果がある。本研究においても、比較し実感

を伴って音楽を聴くことで、より自分の生活や社会と関わらせ、郷土の音楽の特徴やよさを理解して聴き深めることができると考える。

教材としては、青森県内の祭を取り上げることが有効と考え、「青森ねぶた」（教材資料として『実践しよう！鑑賞の授業 郷土の音楽』（公財）音楽鑑賞振興財団発刊）を活用した比較鑑賞を行う。

（3）教材映像音源の研究と制作

前項でも述べたが、教材として活用できる準拠教材の音源は、祭の様子全体像としてとらえていることが多く、教材として使用は可能であるが、学習の過程で必要な唄や楽器の演奏にフォーカスした部分など、不足分を補う必要も考えられる。

まずは、現在ある教材映像の特徴を理解し、それをどのように指導の実際と関わらせ活用すると生徒の学びが深くなるのかを研究する。次に、祭の音楽の場合は、どのような楽器が使われ、どのような音楽の構造になっているのか、祭のどの場面でその音楽がどのような役割を果たしているかを、聴き取り理解することが重要となるので、既存の教材音源に何をプラスすると効果的に活用し学習できるかを検討する。検討内容を元に、必要な音あるいは場面を撮影・編集し、補助教材として制作する。

また、補助教材とは別に、題材構成にあわせて、一連の授業の流れにタイアップさせるように編集した教材も制作する。

取材では、祭の全体像や音楽に関わることは当然であるが、親方や運行責任者など祭に関わる側の考える音楽のよさ・見せどころ・聞かせどころ、郷土の祭の価値やこれからの祭のあり方など、見る側ではわからない祭の背景など

も重要な部分としてとらえ、音楽のみならずインタビューなども撮影・編集する。授業に活用することや、必要な音源映像を撮ることのみを目的とするのではなく、生徒の価値意識をひろげる材料をストックし、何かの機会に視聴し、生徒が感じたり・考えたりする場に備えるためである。

取材に際しては、取材先の祭組や団体に、授業で取り上げる理由や学習によってどんな力が生徒に身に付くのかなど、学校の授業で祭の音楽を取り上げる意図や有効性を伝え撮影協力を仰ぐ。また、学習することで祭の魅力が伝わり、祭の参加者を増やしたり後継者育成につながることもあるので、この授業や教材制作を行う価値を伝える。

あわせて、八戸市が所有する「八戸三社大祭」のデータベースや視聴覚センターなどにある既存の映像を教材として活用する可能性も探る。

3. 研究方法

本研究は、生徒が郷土の音楽のよさや美しさをより明確に聴き取り、音楽を通して自分の郷土や自分と社会とのつながりを考え、自分の生活や生き方を豊かにする資質・能力の育成を目指すものである。よって、具体的な研究方法を以下のように設定する。

(1) 生徒の実態把握

八戸市内中学校 24 校において、「えんぶり」を総合的な学習等で取り上げている学校が 2 校、祭にも参加している学校が 1 校、個人的に参加している生徒の在籍校が 10 校あり、4 割程度の学校に「えんぶり」と何らかの関わりをもつ生徒がいる。それに対して、「八戸三社大祭」は学習として取り上げている学校はなく、お囃

子や引き子（山車を引く役割）として参加している生徒がいる学校は 12 校である。多くの学校で、音楽であれ総合的な学習であれ、どのように取り上げて学習として成立させるかについては、まだ検討されていない現状である。これは「日本一の山車祭」というキャッチフレーズで東北の夏祭りの一つになってしまったため、生徒は既に知っているであろうという指導者の認識からだと考える。しかし、予備調査によると、郷土の音楽として「八戸三社大祭」の祭の音楽を理解して聴いたり、祭における音楽の役割等を考えたりして聴いている生徒は極々少数である。

そこで、生徒の実態把握と指導内容の明確化のために、研究メンバーの勤務校の生徒を中心に以下のアンケートを実施する。

- ① 「自分の住む地域の祭を知っているか」
- ② 「その祭と自分との関わりはどのようなものか」
- ③ 「使用されている楽器」
- ④ 「何のための祭か、祭において音楽はどんな役割を果たしているかなど、音楽との関わりで知っていること」
- ⑤ 「『八戸三社大祭』以外で知っている県内・県外の祭」

実態調査により、自分の郷土の祭の音楽をどのようにとらえているのか、郷土の音楽について育成する資質・能力は何かが明確になり、指導内容・指導方法などを検討することができる。

(2) 「山車」組の取材

生徒が町内で参加している「山車」組、三つの神社（三社とは八戸市内にある「新羅神社」、「神明宮」、「法霊大明神」のこと）との関わりや、祭の歴史からみた伝播系統などを元にピックアップした「山車」組について、囃子や唄の

練習から本祭までを継続して取材・収録する。

あわせて、前項でも述べたが、運行責任者や親方にも祭の内容・組で理解している祭の歴史、音楽の伝承方法、祭や音楽の見せどころや聞かせどころ、今後の展望などを取材する。複数の組を取材することで、祭の音楽の特徴やそれぞれの違い、系統性や伝承についても知ることができる。

取材内容を元に教材研究を行い、この祭に関わる音楽の真の魅力はどこか、生徒がそれをどのように学び理解するか、どのように価値観をもつのか、今後の自分の関わりや取り巻く社会とどのように関わらせるのかなど、授業の視点の設定について研究する。

研究の中心は「八戸三社大祭」の音楽であるが、「八戸三社大祭」を運営・運行をする方々が「えんぶり」に関わっていることが多いことから、「えんぶり」も同様の視点で再度検討し、祭と音楽の関連性、豊作祈願や豊作加護を目的とする祭の音楽の共通性や固有性などの特徴を理解し、比較しながら、八戸の「祭の音楽」の価値を考えるための材料とする。

(3) 教材分析方法の検討

「八戸三社大祭」の音楽を「音楽を形づくっている要素」を用いて分析する。その際に、それらの要素を西洋音楽の言葉に置き換えるのではなく、その音楽を演奏したり伝承したりする中で伝統的に用いられ培われてきた「ことば」を重視する。取材から得たそれらの「ことば」については、授業において言い換えるのではなくそのまま活用し、生徒に理解・定着させる。

その分析を通して、行った分析の手法が他の郷土の音楽を取り扱う際の分析に有効な方法として活用できるか研究する。

(4) 育成する資質・能力を明確にした題材構成

祭の音楽の特徴をどのようにとらえ、学習の中心をどのように設定し、生活や社会の中の音楽・音楽文化と豊かに関わるために、どのような資質・能力を育成するかを検討し、題材構成（事例開発）を行う。

(5) 授業実践と検証

研究メンバーの授業実践を通して、生徒に身に付けさせる資質・能力がどのように育成されているか検証する。授業実践は映像で記録し、授業後の検証に活用する。可能な限りの授業実践をして、その結果から指導計画や授業構築の改善、発問・指示などを検討し、授業そのものの改善を行う。

(1) のアンケートについては、授業後、再度実施するとともに、生徒が学習を通して蓄積された知識を元に思考・判断したことや、その変化をワークシートの記述や授業の発言内容で見取り、学習することで生徒がどのように変容したかを確認する。

また、授業実践は取材した祭の関係者にも見ていただき、助言をいただく。それにより、一方向からの偏ったとらえや指導になっていないかなど、軌道修正を行うことができると考える。

(6) 基本的手順の提示

郷土の音楽や我が国の伝統的な音楽の指導において、何を学習の中心に据え、どのような学びが行われればよいのかを、音楽の分析、教材研究、題材構成を通して考え、その方法を基本的手順として提案する。

すべての音楽に有効な手順とはならないかもしれないが、様々な郷土の音楽の授業構想の核として活用できるようにする。

4. 研究スケジュール

本研究は音楽の音源資料をストックするための取材等に時間がかかることから、2020年度を事前研究と位置づけ、先行実施している。

(1) 事前研究 (2020年度)

- ・「八戸三社大祭」は新型コロナウイルス感染予防のため縮小されたので、お囃子のみ収録(8月)
- ・既存の資料を活用した収録計画の作成
- ・県内の様々な地域の郷土の音楽についての調査

(2) 2021年度(第1年次)

- ・「八戸三社大祭」の教材研究、題材構成、指導案作成(4月～6月)
- ・アンケートの実施(5月～6月)
- ・取り上げる様々な郷土の音楽の選定と教材分析(4月～6月)
- ・「八戸三社大祭」の映像収録及び教材映像作成(7月～12月)
- ・県内の郷土の音楽についての取材(8月)
- ・釜石「虎舞」の視察と収録(10月)
- ・研究メンバーによる授業実践(11月～1月)
- ・授業後に、検証のためのアンケートの実施(11月～1月)
- ・「八戸三社大祭」の題材構成の再検討
- ・様々な郷土の音楽についての音源収集(1月～2月)
- ・第1次研究の実践のまとめ(2月～3月)

(3) 2022年度(第2年次)

- ・様々な地域の郷土の音楽の題材構成と指導事例の完成(4月～5月)
- ・アンケートの実施(4月～5月)
- ・授業実践及び授業の分析(講師招聘を含む)(6月～10月)
- ・「八戸三社大祭」の教材映像不足分について収録(7月～8月)
- ・映像活用計画と教材映像制作の完成(8月～10月)
- ・まとめの授業実践及び授業の分析(講師招聘を含む)(11月～12月)

- ・検証のためのアンケートの実施(11月～12月)
- ・研究のまとめ(1月～3月)

※映像収録については、コロナ禍で祭が縮小されたり中止されている状況もあるが、祭ではなく神事として縮小して実行される場合もあるので、「山車」組と連絡を取りながら取材を進める予定である。

5. 研究成果について

今回の研究は「八戸三社大祭」を中心教材として取り上げることから、八戸市中学校音楽教育研究会会員と、「八戸三社大祭」と似たような祭のある青森県南の中学校音楽教育研究会に、授業実践等を公開する。それらの参観を通して、音楽の学習において生徒に郷土の音楽の理解をどのように進め深化させるのか、どのような資質・能力を育成することができるのかなどの成果を共有したい。また、授業検討や実践についても各研究会と相互に行うことが可能であるので、広く実践を伴った研究ができると考える。

音楽のよさや美しさを聴き味わうだけでなく、社会や生活の変化にも対応しながら存在し続ける郷土の音楽の意味や役割を理解し、音楽を実感しながら価値を見いだしたり、その音楽と進んで関わったりする生徒を育成するための本研究は、これからの「郷土の音楽」の指導に大きく貢献するものとする。

【参考文献】

- ・伊野義博(2010.4)『日本の伝統音楽と〔共通事項〕』(2010.7)『我が国や郷土の伝統音楽を授業で扱う具体的な方法論』季刊「音楽鑑賞教育」音楽鑑賞教育振興会
- ・村山二郎(2015)「日本の祭笛・太鼓名曲集」音楽之友社
- ・「新編八戸市史」民俗編、「概説八戸三社大祭」八戸市図書館
- ・DVDブック事例集2 実践しよう!鑑賞の授業『郷土の音楽』音楽鑑賞振興財団

● 入選

<研究テーマ>

曲想や音楽の構造を感受し、言葉で表せる生徒の育成を目指して ～生徒が分かる、書ける、語らう音楽授業の展開～

長崎大学教育学部附属中学校教諭

力田 和歌子



1. 研究テーマ設定の趣旨

2020年の幕開けとともに、人類は、正に未曾有の事態に直面した。私たち中学校教員は、未だに終息の糸口が見えない新型コロナウイルスの感染防止に努めながら、来年度からの新学習指導要領の全面实施に向け、これまでどおり、着々と準備を進めていかねばならない。一方、長引く休校とこれに伴う在宅学習を余儀なくされた子どもたちに対する、確かな学力保証も重要な課題である。これを機に改めて、「授業でしか身に付かない力」について、一層考えを深め、明確にし、その育成のための実践を重ねていく必要がある。

新学習指導要領の総則には、「生徒の発達段階を考慮して、生徒の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を重視する」と述べられている。また、この学習の基盤として例示された3つの資質・能力の一つに「言語能力」が掲げられており、現行の学習指導要領において思考力・判断力・表現力等育成の手立てとして提唱された「言語活動の充実」がしっかりと引き継がれている。さらに、音楽科改訂の基本的な考え方に、「他者と協働しながら、音楽表現を生み出したたり音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見出し

たりすることができる」と示されており、音楽に関する言葉を用いて、自己のイメージや感情、音楽に対する評価などを伝え合って共感する活動や、音や音楽によるコミュニケーションの一層の充実が求められている。

例えば、「ブルタバ」の主題について、時を超えて人々に愛される理由を級友と語り合ったり、「ボレロ」について、各自が考えるこの楽曲の面白さを互いに伝え合ったりする活動が、ますます重要となってくる。そして、その際に不可欠なのが、言語、すなわち音楽に関する言葉である。

音楽の鑑賞と言語活動とを往還させることによって、音楽を自分なりに評価しながらそのよさや美しさを味わって聴く力を育み、生徒一人一人の音楽に対する価値意識を形成することは、音楽を学ぶ大きな意義であり、目的であるとも言える。こうした学習を通して、生徒の学習意欲を一層喚起し、級友と音楽のよさや美しさを語り合い、学習内容の確かな定着を図ることができれば、日常生活や社会の中で、音や音楽、音楽文化と生涯にわたって豊かに関わることができる生徒を育成することができると思う。

本研究では、音楽科における言語活動の可能

性と有効性を明らかにし、曲想や音楽の構造を感受し、言葉で表すことができる生徒の育成を目指して標記テーマを設定した。

2. 研究の概要

本研究テーマを設定するに至った経緯、その契機となったのは、コロナ禍での今年度当初の第1学年の授業であった。歌唱の制限と長期の臨時休校に伴うカリキュラム再編を余儀なくされ、悩み抜いた結果、例年は同学年の秋以降に取り扱うオッフェンバック作曲「天国と地獄」とサン＝サーンス作曲「動物の謝肉祭から『かめ』」の比較聴取から始めてみることにした。学習課題を「2曲に隠された秘密を探ろう」とし、それぞれの曲想を感じ取らせ、音楽を形づくっている要素を焦点化して聴取させ、最終的に「音楽の構造が曲想を生み出している」ことを理解させることを試みた。その後、この題材で、大きな着眼点として取り上げた、楽曲の構成を手掛かりに、ヴィヴァルディ作曲「春」の学習に取り組ませ、ソネットと音楽の特徴を結び付けながら情景をイメージさせた。この一連の学習を振り返って、ある生徒がその思いを次のように記している。

「天国と地獄」と「かめ」を聞いた時、「この2曲は全然違う！」としか思えなかった。しかし、何度もよく聴いてみると、旋律がすごく似ていることが分かった。それが分かった時は、すごくびっくりした。速さ、音価、楽器などが違うだけでこんなにも印象が変わるものかと。「春」で、先生が「カタカナでこの曲のつくりを表現してみてください」とおっしゃったとき、私は意味が分からなくて全く書けなかった。その時、私は「悔しい」と思った。もっと音楽について知りたい、と。指揮者がいないのに演奏者の息がぴったり合っていて、通奏低音が聞こえたときは、思わず「すごい」と声が出た。(中略)

その曲にどんな工夫が施されているのかわかるたびに、その曲がより美しく聴こえた。(中略) ヴィヴァルディさんを尊敬したくなった。

生徒同士の対話が制限される中、自己内対話や振り返りの場面と手立てを吟味しながら実施したこの学習を通して、音楽的な感性の錬磨や能力の伸長には、音楽における言語活動が重要であることを実感した。本研究では、小・中9年間の学びの系統性にも配慮しながら、鑑賞領域の授業における言語活動の在り方について探究・検証してみたい。

(1) 鑑賞の学習を通して“音楽に関する言葉＝共通の語彙”を拡大する

音楽科における知識は、①曲名や作曲家等、音や音楽を伴わなくても得られる知識、②音楽を形づくっている要素の特徴やそれらの働きが生み出す特質や雰囲気などのように、知覚・感受を伴うことによって得られる知識、③②を自己のイメージや感情などと関連付けながら、多様な音楽活動を通して自己との関わりの中で得られる知識の3種類に整理することができる。鑑賞の活動において中心となるのは②であるが、②に係る楽曲の雰囲気や曲想の捉え方は、個人の経験に大きく左右され、客観性に乏しいと言える。そのため、生徒一人一人が音楽のよさや美しさを見出し、互いに共有したり、知識として定着させたりするためには、音楽の構造、とりわけ音楽を形づくっている要素と曲想との関わりを捉え、根拠を明確にして表現することのできる能力を育む必要がある。その際に欠かせないのが、音楽に関する言葉であり、生徒の発達の段階を踏まえながら、各教材の学習を通して「共通の語彙」をいかに拡大していくか、その方策を追及したい。

(2) 学習目標の焦点化・明確化及び「題材を貫く問い」の設定と授業実践

すべての授業において、学習目標、すなわち生徒に身に付けさせたい力を焦点化・明確化することは、とても大切なことである。特に言語活動を活性化しながら深い学びを実現するためには、既習の知識を駆使したり、自らの経験と照らし合わせながら、生徒にとって考える価値のある「題材を貫く問い」を設定することが重要と考える。こうした「問い」の善し悪しや生かし方によって、生徒の学習に対する関心・意欲の高まりや思考の深まり方は大きく違ってくる。そのため教師には、生徒たちが主体的に学び考える必然性や切実感のある発問、自由な発想を促す手立て、多面的・多角的な見方・考え方が生まれ交流することのできる場の設定など、より一層の創意工夫が求められる。本研究では、鑑賞領域における学習内容の精選と学習目標の更なる焦点化・明確化を図るとともに、適切な「題材を貫く問い」の設定による見通しを持った授業の実践と省察を通して、より豊かで確かな鑑賞の授業方法の開発を目指す。

(3) 小・中学校9年間の学びの系統性を意識した授業構想及び授業実践

児童生徒は、発達段階に応じて使える言葉や語彙が増え、各教科等の授業で身に付けた基礎的・基本的な知識・技能を活用して、学びを深めることができるようになる。音楽科においても、小学校での学習内容や学びの実態を把握した上で、中学校での指導に生かし、学びを積み上げていくことが、確かな学力の向上につながるものとする。本研究では、小・中学校の各段階での学習内容（音楽に関する言葉の学習を含む）を整理し、9年間の系統性を意識した

鑑賞の授業の在り方を探究し、小・中協力校との共同実践を通して、その効果を検証する。

鑑賞領域における、以上3つを柱とする研究と実践を通して、生徒一人一人が学びの主体者として音楽活動に取り組みとともに、汎用性の高い思考力・判断力・表現力が身に付く音楽教育の実現を目指したい。

3. 研究の方法

本研究では、音楽科における言語活動の可能性とその有効性を、実践を通して検証し、感受した曲想や音楽の構造などの関わりを言葉で表すことができる生徒を育成し、生徒一人一人の音楽に対する価値意識の形成を目指している。研究を進める上での具体的なポイントとして、「授業構想の検討」、「学びの系統表の作成」、「検証方法の工夫」の3つを考えている。

(1) 適切な言語活動を取り入れた鑑賞領域における授業構想の検討

① 楽曲の構成や形式に着目した授業構想

先述した題材「2曲の比較聴取」では、楽曲の構成を捉えることによって、同じ旋律が使われていることに気付いたり、「春」では、主題を何度も挟みながら進行するリトルネッロ形式を理解したりすることができた。楽曲の全体像を把握させること、つまり、楽曲の構成を捉えることは、生徒の楽曲に対する理解をさらに深めることを実感した。併せて、中学校の教科書に掲載されている鑑賞領域の学習目標には、音楽を形づくっている要素のうち、楽曲の構成や形式に関するものが多くあることから、それらを核として、適切な言語活動を取り入れた授業を構想・実践し、その効果を検証してみたい。

【各学年の主な題材及び学習目標の具体例】

○第1学年 「和声と創意の試み」第1集「四季」から「春 第1楽章」

『ソネットと音楽との関わりや、音楽の形式を理解して鑑賞しよう』

○第2学年 「交響曲第5番 ハ短調 作品67」

『音楽の構成の仕方や、形式を理解して鑑賞しよう』

○第3学年 「ボレロ」

『楽曲全体の構成を理解して鑑賞しよう』

※「音楽のおくりもの 中学音楽1、中学音楽2・3上、中学音楽2・3下」(教育出版)より

② 効果的な学習課題や発問の検討

楽曲の背景や楽譜などから、多面的に、多様に、柔軟に思考することができる学習課題や発問の工夫に努め、個別の学びと協働的な学びの一層の充実と双方の相乗効果を図ってみたい。

発問を考案する際の視点には、次の2つがある。このことに留意する必要がある。

① 学習した事項や過去の経験・関心の有無などを問うもので、テストでいえば、単純再生や再認の問題にあたる。

〈具体例〉「交響曲第5番ハ短調」の作曲者は誰ですか。

② 知識、経験などをもとに考えて得た結論を問うもので、記憶発問より難しい。

〈具体例〉「荒城の月」(土井晩翠作詞、滝廉太郎作曲)の歌詞の内容や情景を表すために、作曲者が曲に施した工夫はどのようなことがあるだろう。

※「学習指導の基礎技術と実践」(東洋館出版社)より、ただし具体例は筆者による

本研究で取り上げる発問は、②の「知識、経験などをもとに考えて得た結論」を問うものである。学習課題を設定する際の考え方も同じである。既習の知識を生かし、自らの考えをもとに他者と意見を交わし、互いの考えをすり合わせることによって、納得解を導き出したり、新

たな考えを生み出したりすることのできるものでなければならない。

(2) 義務教育9年間の“学びの系統表”の作成

例えば、「音楽を形づくっている要素」について、「リズム」「速さ」「旋律」「強弱」は小学校低学年で、「音色」は小学校3年生までに、「テクスチャ」「構成」「形式」の概念についても小学校低学年から教科書に掲載されている。また、「フレーズ」や「動機」という音楽に関する言葉も、小学校高学年での学習事項となっている。

しかし、「リズム」一つをとっても、2拍子と3拍子が識別できるか、6拍子のリズム打ちができるか、各拍子の特徴を言葉で説明できるかなど、各学年で身に付けさせたい知識や技能、音楽に関する言葉等の細かな分析と確かな指導が求められる。

このように、小学校における学習内容や学びの実態を把握し、小・中間の学びの系統性を担保することは、言語活動を取り入れた鑑賞授業を構想する上で大きな手がかりとなるものと考ええる。そこで、小・中9年間で身に付けるべき基礎的・基本的事項を整理し、特に鑑賞領域における言語活動に必要な“音楽に関する言葉”について、教科書の内容や授業における児童生徒の発言・記述内容をもとに整理してみたいと考えている。

(3) 研究成果の検証方法

検証方法として、授業実践の記録とその分析を中心に据えた研究としたい。また、地域の学校にも実践と記録を依頼し、本研究の汎用性についても検証したいと考えている。

① 授業における生徒の発言内容等の記録

授業中の生徒の発言や活動の様子を録音・録画し、事実在即し成果と課題を洗い出す。

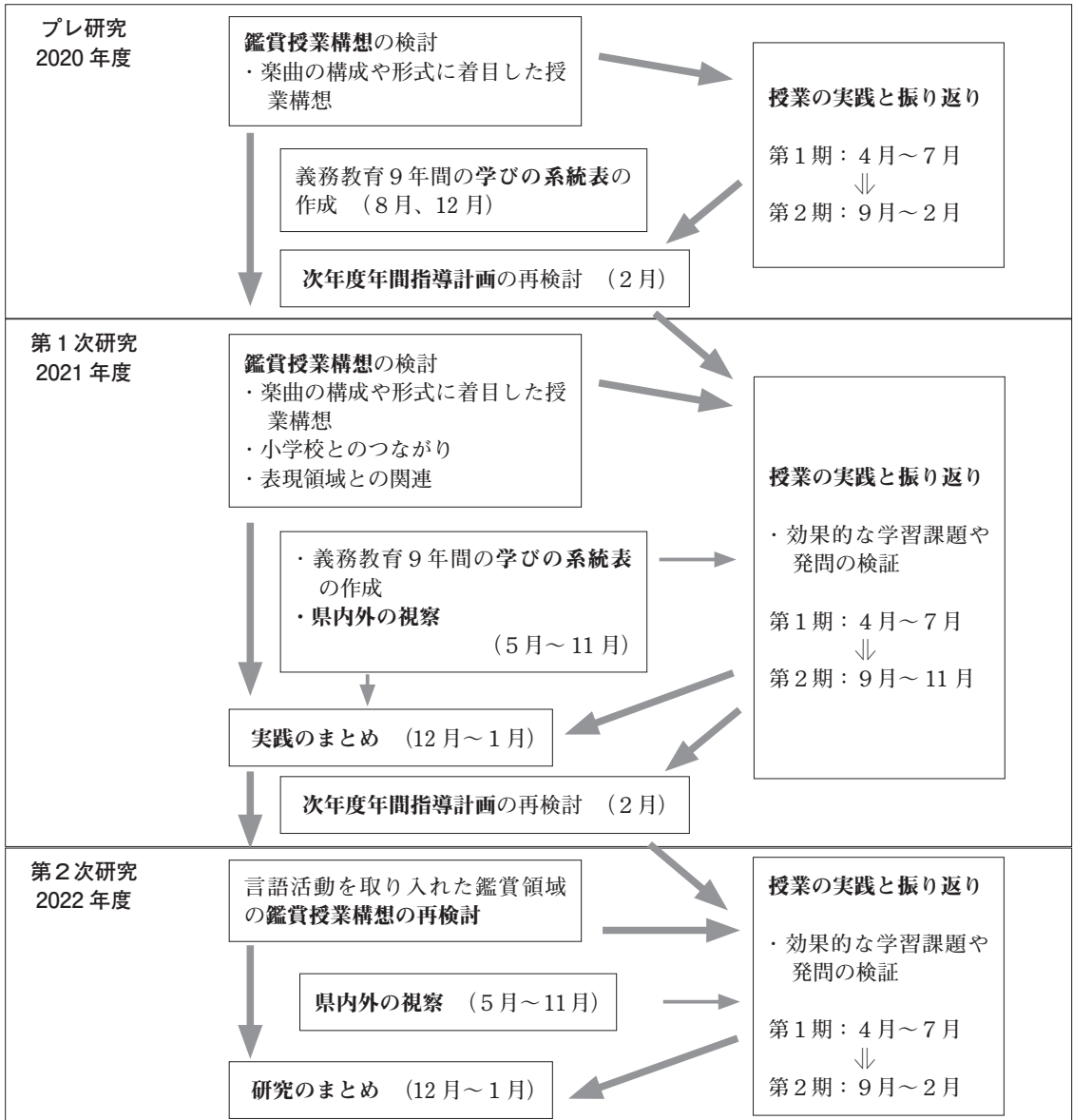
- ② ワークシートにおける生徒の記述内容の分析
 授業で使用したワークシートの記述内容を基に、生徒が楽曲の構成や形式を手がかりに、音楽の構造をいかに捉え、どのような言葉で表しているか、整理・分析する。本研究の大事なポイントである。
- ③ アンケート調査及び確認テストによる検証

定期的にアンケート調査を実施し、授業及び音楽に対する生徒の意識の変容を把握する。また、授業で用いていない楽曲による確認テストを行い、学びの成果を検証する。

4. 研究スケジュール

2020年度の予備調査等のプレ研究を含めて、以下のとおり3年間の研究とする。

【研究スケジュール】



【第1次研究における授業計画の例】

①題材 「2曲に隠されている秘密を探ろう」(中1・第1期)

教材「天国と地獄」(オッフェンバック作曲)

「かめ」(サン＝サーンス作曲「動物の謝肉祭」から)

まず、各曲の曲想を感受し、そのように感じた理由を音楽を形づくっている要素をもとに整理する。楽曲の構成に着目し、2曲には同じ旋律が使われていることに気付くことで、音楽の構造が曲想を生み出していることを理解する。

②題材 「情景をイメージしながら聴こう」(中1・第1期)

教材「和声と創意の試み」第1集「四季」から「春 第1楽章」

①の学習を経て、音楽を形づくっている要素の中でも「楽曲の構成」に着目することで、楽曲全体をつかむことができることを確認し、リトルネッロ形式を知った上で、ソネットと関連付けながら想像した情景を言葉で表現する。

③題材 「ブルタバの曲の世界の扉を開けよう」(中2・第2期)

教材「ブルタバ」

学習事項を5つに項目立てし、スメタナがどのようにして祖国への思いを音楽で表現しようとしたかについて、曲の背景と関連付けながら考え、各項目ごとに適切な言葉を用いて表現する。

④題材 「長崎と音楽」(中3・第2期)

教材 世界のポピュラー音楽、「思案橋ブルース」、「長崎の鐘」等

ロックやジャズ、サンバ等の世界のポピュラー音楽の特徴を理解し、日本の歌謡曲や郷土長崎をテーマとして作られた曲の数々との関連を探りながら、音楽と郷土の魅力について語り合う。

5. 研究成果について

生徒が、楽曲から感受したことを、“音楽に関する言葉”を用いて表現できるようになるための具体的な学習内容や方法及び言語活動の在り方を明らかにすることは、これからの音楽科教育の充実・発展に必ず役に立ち、新たな可能性を拓くことにつながるものと考えられる。また、主として鑑賞領域の研究であるが、その成果は表現領域にも応用できるものであり、このことにも留意しながら研究を進めてみたい。長崎大学教育学部の附属学校という利点を生かし、学部や附属小学校、さらには、地域の小・中学校とも連携することで、研究の幅を広め、深めるとともに、成果の共有にも努めることとする。本研究を行うことによって、県内はもとより、全

国で授業実践に力を尽くしておられる先生方と共に研鑽を積んでくれるような取組につなげたい。

【参考文献】

- ・文部科学省「学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽科編」教育芸術社, 2017
- ・文部科学省「学習指導要領(平成29年告示)解説 総則」教育芸術社, 2017
- ・文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に 向けて～」2011.5
- ・筑波大学附属中学校著「学習指導の基礎技術と実践」東洋館出版社, 2013
- ・佐野靖編著「中学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック」教育芸術社, 2018
- ・教育出版「音楽のおくりもの」中学音楽1, 中学音楽2・3上, 中学音楽2・3下, 2015
- ・教育調査研究所「教育展望」2019.9
- ・公益財団法人音楽鑑賞振興財団 季刊「音楽鑑賞教育」vol.41, 2020.4
- ・長崎大学教育学部附属中学校「教育研究発表会 研究紀要」2015